

水稻新品種「えみほころ」の栽培の留意点

水田高度利用担当 山本彩乃

水稻新品種「えみほころ」の高品質安定栽培方法を検討しています。今回はこれまでに分かった栽培の留意点を紹介します。

早植栽培となる5月中旬植の施肥では、基肥を5kgと7kg、穂肥を2kgと3kgを組み合わせて検討した結果、基肥を5kgから7kgに増やすと稈長が長くなり、有効穂数、 m^2 当粒数が増加しました。穂肥を2kgから3kgに増やすと、有効茎歩合が高まり、有効穂数が増える傾向でした。このため、施肥量の少ない基肥5kgと穂肥2kgを組み合わせた計7kgでは収量が500kg/10a以下と低くなりました。基肥と穂肥の合計を8kg以上にすると収量は500kg/10aを上回りましたが、合計8kgから10kgに施肥量を増やしても、 m^2 当粒数が増加する一方で登熟歩合が低下し、収量に大きな差はありませんでした。さらに施肥量が多すぎると倒伏およびいもち病の発生が懸念されることや、肥料費の増加を考慮すると、早植では基肥5～7kg、穂肥2～3kg、合計8～9kg/10a程度がよいと考えられました。

普通期栽培となる6月下旬植では、基肥7kgで稈長が長くなり、施肥量によって m^2 当粒数、登熟歩合、千粒重はほぼ変化しませんでした。この結果、収量は施肥量によらず同程度で、いずれも500kg/10a以上となりました。基肥の増加により稈長が長くなることや、高温であった令和5年に穂肥3kgで登熟歩合が高まったことを踏まえると、普通期の施肥量は、基肥5kg、穂肥2～3kg、合計7～8kg程度がよいと考えられました。

なお、「えみほころ」は同条件で栽培した「彩のかがやき」に比べ、過去4年の平均稈長が早植で8cm、普通期で12cm長くなりました。耐倒伏性は「強」ですが、過剰な施肥は倒伏を助長し、いもち病発生リスクも高まるため、注意が必要です。

また、穂肥施用時期は、早植が出穂20～15日前、普通期では出穂15日前が目安であり「彩のかがやき」や「彩のきずな」よりも遅めとなります。遅めに穂肥を施用することで粒厚が厚く、千粒重が重く、整粒粒比は高まり、収量・品質の向上が期待されます。ただし、遅くなりすぎると粒数が確保できず減収し、タンパク質含量の増加による食味低下のおそれがあります。

収穫適期は、登熟期間の気象条件により変動しますが、出穂後の日平均積算気温を目安することで判断が可能であると考えられ、収穫開始時期はおおむね1000℃となります。特に、高温年は帯緑色粒割合の低下よりも玄米の成熟が早まることがあるため、刈り遅れにならないようにするとともに、胴割れ米を防ぐために過乾燥に注意しましょう。

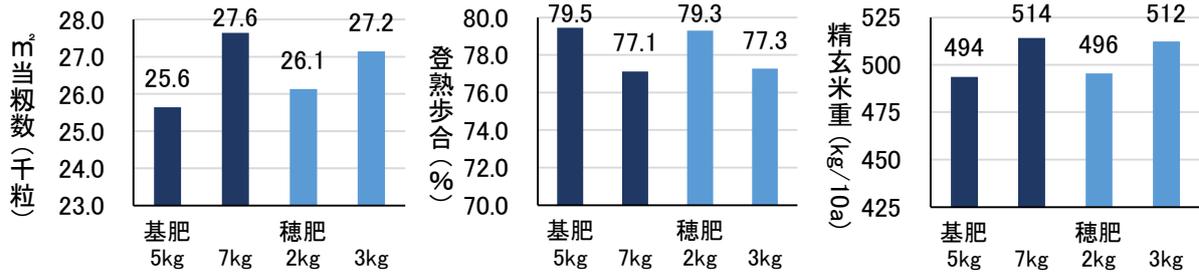


図1 基肥量、穂肥量と収量構成要素、収量（5月中旬植）

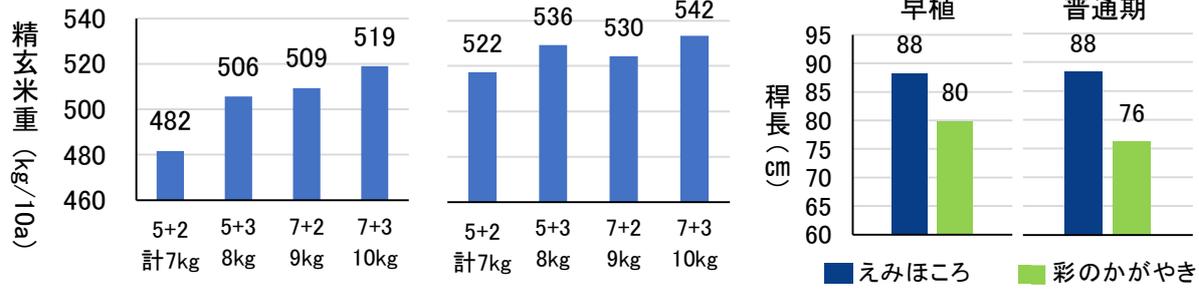


図2 基肥、穂肥の合計量と収量
(左図：5月中旬植、右図：6月下旬植)

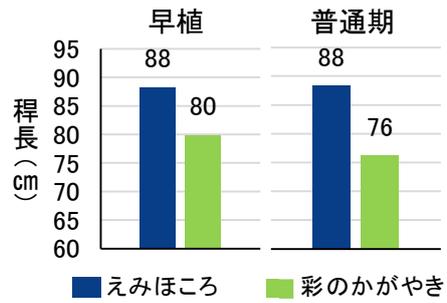
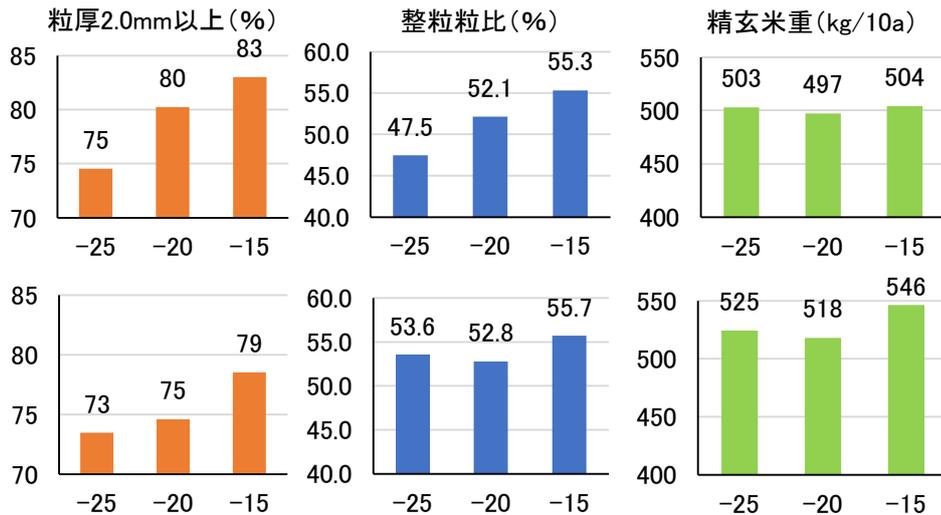


図3 穂長の比較



穂肥時期(出穂前日数) ※整粒粒比:穀粒判別器による測定

図4 穂肥時期と収量、品質（上図：5月中旬植、下図：6月下旬植）

表1 過去4年間の収穫適期（2024年は暫定値）

作期	年	(検査等級1等となる) 出穂後日数	積算気温	籾水分	帯緑色籾割合
早植	2021	41～51日	1015～1244℃	27～21%	20～2%
	2022	38～46日	1015～1217℃	26～21%	21～3%
	2023	32～39日	981～1168℃	29～26%	46～17%
	(2024)	36～44日	1041～1274℃	27～25%	14～5%
普通期	2021	41～48日	960～1115℃	26～23%	22～10%
	2022	40～55日	990～1273℃	26～23%	18～2%
	2023	34～44日	999～1238℃	29～24%	30～7%
	(2024)	36～47日	990～1245℃	26～23%	11%～2%